自然に触れない自然観察なんて・・・

NPO 法人自然観察大学学長　唐沢孝一

リモートワーク、オンライン会議、オンライン授業・・・、移動せずに情報伝達が出来る、実に便利なツールとして推奨され、大いに流行しつつあります。

コロナ禍にあっては三密（密集、密接、密閉）を避けなければなりません・・・・、しかし、飲んだり、食ったり、歌ったり、だべったり。人間活動の大半はオーラルであり、口なしには極めて困難です。社会性動物であるヒトにとって、コミュニケーションは欠かせませんし、それ無しにはヒトであることを放棄するようなもの、です。

20～30 年くらい前のこと。学校にパソコンが導入され、これからは、現地に行かなくてもインターネットでどんな情報も入手できる・・・・。ある数学の先生、「修学旅行はネットで出来るし、レポートも書ける・・・・」、な～んて言ってました。

確かに旅行なんかに行かなくてもネット検索し、高画質の素晴らしい画像を探し出し、視聴できる時代です。たちどころに知識は増え、現地に行ってきた、かのような気分になれます。でも、大方の人は、「そんなことできる筈ない・・・・・」、「どこか変だな・・・」と思っていたのではないでしょうか・・・。

2020 年、世界を席巻する新型コロナウィルス、いきなり、ヒトの口を封じてしまいました・・・。大勢のヒトが密に集まれなくなりました・・・。その結果、出勤せずにオンラインでの在宅勤務が導入されました。オンライン授業を導入した学校も沢山あります。特に大学の講義は、その大半がオンライン。ところが・・・、2～3 ヶ月が過ぎたころから、学生の間で何とも言えない不安が・・・、不満が・・・、吹き出てきました。ようやく、オンラインの本質に気づきはじめたのでした。

テレビ番組で世界各地の大自然、珍しい動物、植物などの紹介があります。ところが、画質がどれほど優れていても、どんなに興味深い内容であっても、その時は面白いのですが・・・、しかし、いつの間にか脳裏から消えてしまい、ほとんどは定着しないのです。それは一体何故なのか・・・。

他方、一度でも行ったことのある場所はどうでしょう・・・。例えば富士登山。苦労して、自身の足で登って山頂に立った、その感動は一生涯消え去ることはありません。

実技を伴う教科を、果たしてネットで教えられるでしょうか・・・？

例えば、研修医の臨床実習、学校の教育実習・・・。例えば、声楽やピアノの実技、調理実習、看護・介護の実習、車の教習所の実技・・・・。おそらくは、難しいのではないでしょうか・・・。では、なぜ難しいのでしょうか・・・？

分かっているようでいて分かりにくいこの問題。実は、50 年も前にすでに「解」を出したのが『近代読書論』（みすず書院、1971）でした。著者の外山滋比古先生いわく、「物理的世界には、形象と質量がある」、「映画では形象はあるが、質量は欠けている」、「しかるに、人々は、映画を、だいたい、物理的世界の忠実な再現であると思って見ている」

なるほど、映画の中の殺人シーン、殺しているように演じてはいるが、本当には殺してはいない、だから平気で観ていられます。

ここで、物理的世界を「野鳥」、映画を「テレビ」、と置き換えてみます・・・。すると、こんな文脈が成立するのではないでしょうか・・・・、「野鳥には、形象と質量がある」、「テレビに写っている野鳥は、形象はあるが、質量が欠けている」「しかるに、人々は、テレビの野鳥を、野鳥そのものを忠実に再現していると思ってみている」

映像を構成するのは、「音」、「色」、「形」といった形象です。が、目の前の自然、花、鳥、昆虫などは、重さがあり、内質があり、エネルギーが内在し、暑さや寒さ、心地よさ、好き嫌いの匂いもあります。テレビドラマの主人公と、主人公を演じるタレントとが重複してみえる、という錯覚。「これからはネットの時代、リモートで何でもできる・・・」そんなことを言うのは、人間とは何かが分かっていない、気づきもしない、新人類にちがいありません。

自然観察やバードウオッチングは、「実践」そのものです。実技を伴う教育実習、声楽や器楽の指導、介護・医療の臨床実習、車の教習所の実技・・・・・・など、代替えの難しいものを、無理して代替えせざるを得ない、そのリスクは社会全体へのボディーブローとなって重くのしかかってくるに違いありません。

自然に触れない自然観察なんて・・・・

柔肌の熱き血潮に触れもみで
　　寂しからずや道を説く君　　（与謝野晶子）

＜編集部より＞本文章は、筆者の HP「カラサワワールド」のフィールドエッセイ「旅と自然の心象スケッチ」 第 1792 回より許可を得て転載しました。

『ちば環境情報センター』ニュースレター282 号
2021 年 2 月 8 日発行